ジュニア・ベアの 決心

森の 中に、幸せな クマの 一家が 住んでいました。パパ・ベアと ママ・ベア、それに 子どもの ジュニア・ベアです。

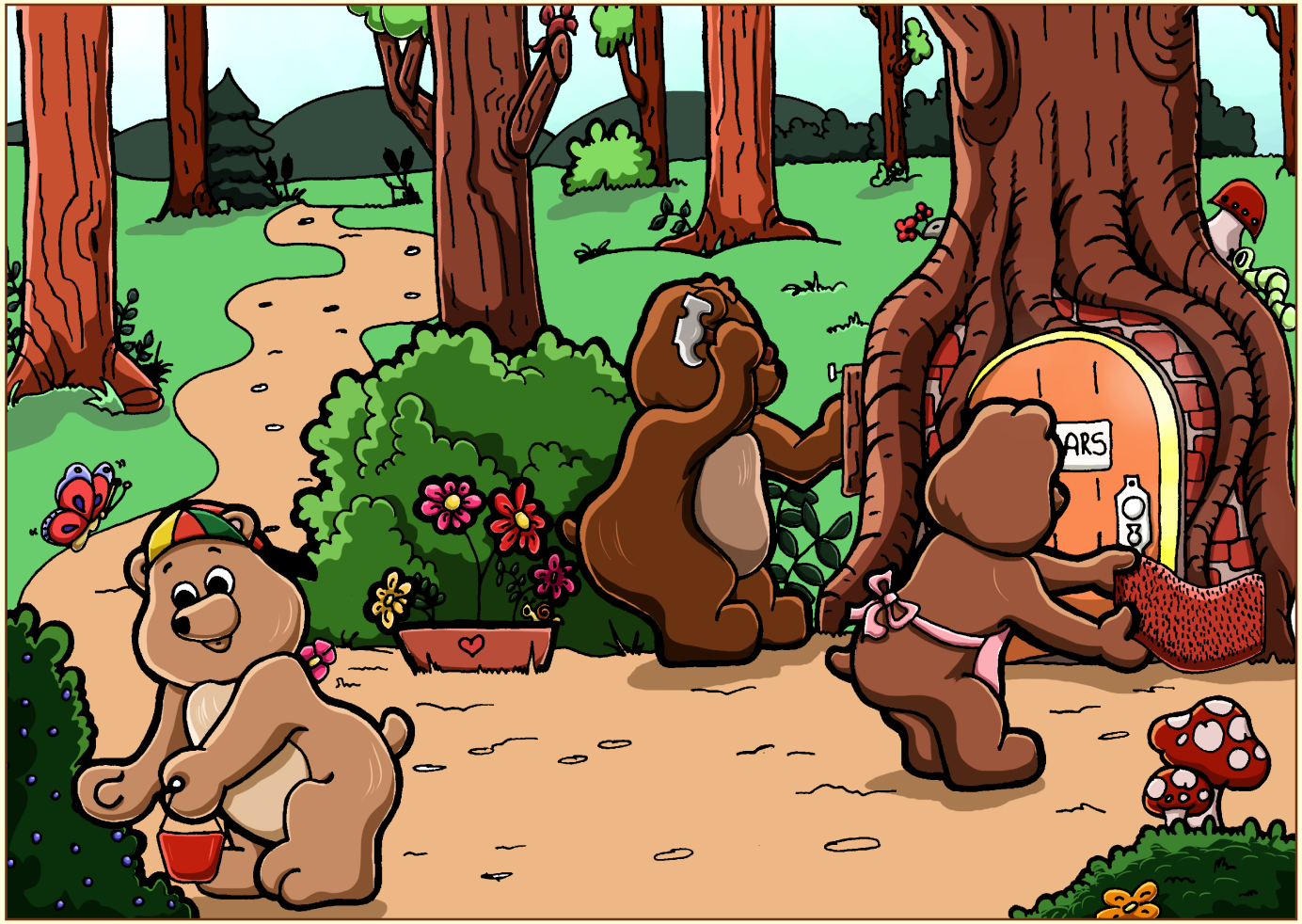
ある 晴れた 日の 朝、ジュニア・ベアに 妹が できました。そうです、ベビー・ベアが 生まれたのです！　ちっちゃくて かわいらしい 赤ちゃんでした。毛は、明るい 茶色を しています。大きくなったら こげ茶色に なるよ、と パパ・ベアは 言いました。ジュニア・ベアは ママ・ベアのために、外から おいしそうな キイチゴを 取って きました。そして ママ・ベアを だきしめ、赤ちゃんにも 投げキッスを しました。

パパと ママ・ベアは、ジュニア・ベアが 小さかった ころから、毎日 午後に なると、森の すぐ外を 流れている 大きな 川に、魚取りに 連れて行って くれていました。パパと ママが 夕食のための 魚を 取っている 間、ジュニア・ベアは、水を バシャバシャしたり、岩から 岩に 飛び移ったりして 過ごしていました。ジュニア・ベアは、川で 遊ぶのが 大好きでした。

午後に なりました。一体 いつに なったら 出かけるのだろうと、ジュニア・ベアは そわそわ しながら ほら穴の 中を のぞきこみました。ほら穴の 中では、パパと ママが 静かに 話し合っています。ママ・ベアは、ほら穴の すみで ベビー・ベアの 背中を やさしく たたいて ねかしつけています。パパは ベビー・ベアに キスを しました。

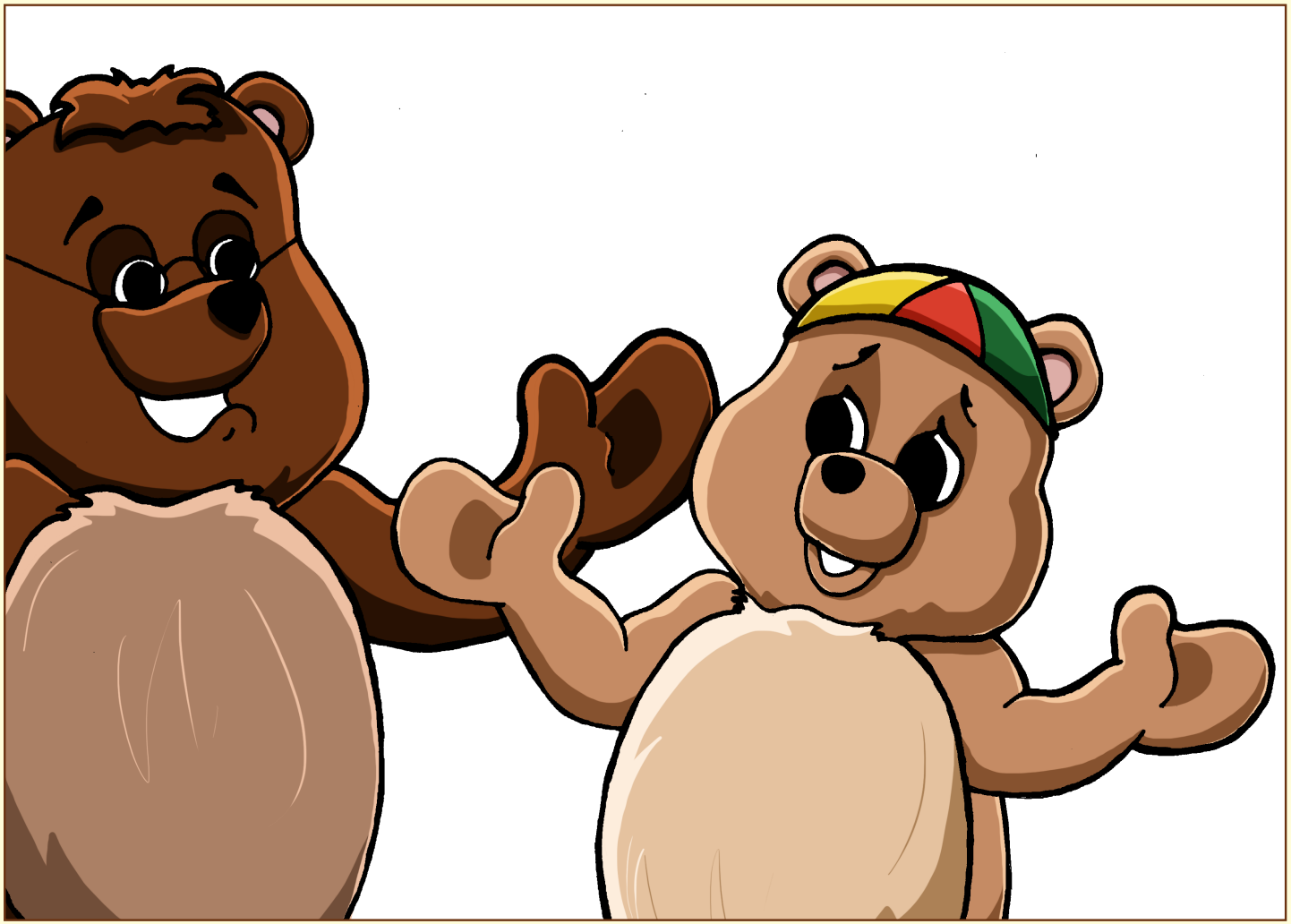
ママ・ベアが ジュニアに 言いました。「ジュニア、今日の 午後は、あなたに おるすばんを してほしいのよ。パパと ママが 夕食の 魚を 取ってくる 間、ベビー・ベアの お守りを しいて ほしいの。お願い できるかしら？」

「ええっ、でも…。川に 行くのが、ぼくは 世界中の 何よりも 大好きなんだ！」　ジュニアの 目には、なみだが あふれ始めました。「ぼくだって、もう 自分で 魚を 取れるくらい 大きいよ。ねぇ、行って いいでしょ？」



「ジュニア、ベビー・ベアだけ ほら穴に 置いていく わけには いかないんだよ。」 パパ・ベアは ジュニアの 肩に うでを 回しながら 言いました。「いっしょに 行きたいのは わかるが、今週の 午後は、パパと ママが 魚を 取りに 行っている 間、おるすばんを して、ベビー・ベアの お守りを してほしいんだ。じきに、ベビー・ベアも いっしょに 連れて行けるようになる。そうしたら、みんなで いっしょに 川へ 行けるんだ。楽しくなるぞ。」

「うん…。」なみだが ぽろりと ジュニア・ベアの 鼻に 流れ落ちました。ジュニアが ほら穴の 中に 入りかけると、後ろから パパ・ベアが 声を かけました。「ジュニア、気分が 向かない 時でも、ちゃんと 言いつけを 守れば、後で よかったと 思うさ。それだけじゃ ない。言いつけを 守ると、たいていは 祝福が 転がりこんで来る ものなんだ。」



ジュニアは まさか、とでも 言わんばかりでした。パパと ママと いっしょに 大きな 川に行って 遊ぶことよりも 楽しいこと なんて ないんだから、と 思いながら。ジュニアは ベビー・ベアの そばに すわりました。ほほえみを うかべながら、ぐっすりと ねむっています。あと 何時間かは 目を さましそうに ありません。

それから、あることを 思いつきました！（パパと ママに 見えないように ついて行って、川の 見えない 所で 遊んじゃおう！）ジュニアは 立ち上がり、ほら穴を 出ました。パパと ママが、森の 外に 続く 長い 道を 歩いているのが まだ 見えます。（まだ 間に 合うぞ。）と ジュニアは 思いました。

けれども ふと、どうして パパと ママが ジュニアに ベビー・ベアの お守りを するように 言ったんだろうと 思いました。もし 言いつけを 守らずに 何か 悪い ことでも ベビー・ベアに 起こったら、とても 悲しく なるでしょう。

ジュニアが 急いで ほら穴に もどって ベビー・ベアを
見ると、まだ すやすやと ねむっていました。
ジュニアは ちょっと 考えてから、ついに 決心しました。
「ぼくが 言いつけを 守らなかったら、パパと ママは
とても 悲しむだろうな。それなら、喜んで 妹の お守りを
しなくちゃ。」 ベビー・ベアを 見ると、気持ち良さそうに
ねむっている 姿が 愛おしく 思えました。ジュニアは
ひざまずいて、毛が ふわふわの ほおに そっと キスしました。
言いつけを 守ろうと 決心したら、ジュニアは 幸せな 気分に
なりました。それから、ベビー・ベアが 目を さましたら
遊べるように、何か おもちゃを 作ってあげることに しました。
何時間か すると、パパと ママが 夕食のための 新せんな
魚を 持って、帰って来ました。ジュニアは おいしい 魚を
お腹 いっぱいに 食べました。そして パパと ママに、その日の
午後 ベビー・ベアのために 作った 小さな 丸い おもちゃを
見せました。ベビー・ベアは それが とても 気に入って、
その夜 ねむりに つくまで 遊んでいました。
「ベビーの お守りを してくれて ありがとう、ジュニア。」と
ママ・ベアが 言いました。
「それに、楽しい おもちゃも 作ってくれてな。」と パパ・
ベアも 言いました。
その週 ジュニアは、パパと ママが 魚を 取りに 行く 午後の
間 おるすばんを して、ベビー・ベアの お守りを しました。
毎日 ベビー・ベアが お昼ねを している 午後の間、ジュニアは
やることを 見つけては いそがしくしていました。ある日は
ほら穴の すぐ外で キイチゴを 集め、次の 日は 木登りを し、
また ほかの 日は ベビー・ベアの ために もっと おもちゃを
作ってあげたり、昼ねを した 日さえ ありました。

そして、ついに ある日、ママ・ベアが、ベビー・ベアは いっしょに 川へ 連れて行けるほど 大きくなったと 言いました。ジュニアは、むねが わくわくしました。川に 着くと、パパ・ベアは 木の みきの くぼみに ベビー・ベアを すわらせました。ベビー・ベアは そこに すわって、パパと ママに ほほえんで 手を ふったりしながら、川の 流れるのを ながめていました。

ジュニアは 川の ふちで 水しぶきを 上げながら、お気に入りの 岩の 上を 飛びはね回っていました。川の 土手を スキップしていると、背の 高い 草が 生えている 所が ありました。

そばに 行って 下を 見ると、ジュニアは あっと おどろきました。草の すぐ そばに 浅い 水たまりが ありました。そこに 何が いたと 思いますか?

「魚だ! 魚が いる! ぼくも 自分で 魚を つかまえるぞ!」 ジュニアの 目は こうふんで かがやきました。魚を そっと 水の 中から すくい上げると、つかまえた えものを パパと ママに 見せに 行きました。

「ぼく、初めて 自分で 魚を つかまえたよ!」 ジュニアは 得意気に 言いました。

「それは それは、大きな 魚だねぇ!」 パパも ほこらしげに 言いました。

「パパ、ぼく、言いつけを 守って、みんなで いっしょに 来れるまで 待って、よかったよ。自分で 魚を つかまえられるなんて、すごく 特別な ことだもの。」

パパは ジュニアに ウインクしました。ジュニアは 魚を 愛しい 妹、ベビー・ベアにも 見せに 行きました。この魚こそ、言いつけを 守ったことで 起こった、特別な ことなのに ちがいありません。

大きくなるに つれ、ジュニア・ベアは、言いつけを 守るのは むくわれる ものだと わかるように なりました。いつも 目で 見て 感じることの できる 大きな ごほうびが あるとは 限りませんでしたが、ただ、自分が 言いつけを 守ったことで、心の 中に 大きな 満足感が ありました。そして、それは いつも、かけがえの ないものだったのです。

作者 : 不明　絵 : ニコール　彩色 : キャサリン・リンチ　デザイン : ステファン・ミーラー
出版 : マイ・ワンダー・スタジオ　Copyright © 2013 年、ファミリーインターナショナル　“Junior Bear’ s Decision” --Japanese
http://www.mywonderstudio.com/0-5/2013/7/22/junior-bears-decision.html